

河と海延の流りて不魚に相果し又畠山電
之助打死若松寺別當打死の事小具は物語中
上流の君守召し愁歎たれ市落涙有り将く有て
頼久公宣ふと湯村近江守もあやし原近我ら供せ
しかも同十日に終る死去しぬ是は戦場にて浅手
深手数々の疵あやまれば不便と云ふはまり
何れと涙を打たせ玉いれは氏親守も共に涙を流し
叔天童落城の跡をハ内へ成生伯耆守に下り下と宣ふ
ことども我光思ふるにハ伯耆守代々の家老ありて其
普代の主を捨て公宣りとし者こそ忽ち約束に違ひ

落城の跡ハ愛宕堂建立有る處まとも終る跡式下
まねを刻へは氣色形なり命はありハ助け下さると改易
は故より長松院言上りては君斜ちて思召さるふ

叔又西指佛向寺に松子を仰ぎし依て長松院中より

御存言瑞藻石釋尊の御舍利水晶珠に青し電赤
梅檀のこききき蓮花おかし大蛇村雲の羽五鈴三鈴
鈴大唐より渡りし及一向の鐘の緒繪讀は掛物四幅
入の箱什物入の皮靴是の是ハ落城の御山形へ引取り
釋尊涅槃記と申將姫は名号以上五幅是ハ寒河江の
林阿の御清繪昔は箱縁起五本の箱縫目をしは衣